

吉田健一著作集

XXII



交遊録
東京の昔

集英社

監修

石川 淳

河上徹太郎

中村光夫

編輯委員

篠田一士

清水 徹

丸谷才一

装幀

栃折久美子

吉田健一著作集 第二十一卷 目次

交遊録

牧野伸顯

五七

G・ロウエス・ディツキンソン

三三

F・L・ルカス

元

河上徹太郎

五

中村光夫

七

横光利一

八

福原麟太郎

一〇三

石川淳

一九

ドナルド・キイン

一五

木暮保五郎

一五

若い人達

一七

吉田茂

一八

東京の昔

解題

一九

三三

交遊錄

牧野伸顯

人間も六十を過ぎるとその年月の間に得たもの、失つたもの、ことを思ふだけでも過去を振り返り、自分の廻りを見廻すのが一つの自然な営みになり、これは記憶も現在の意識も既に否定も反撥も許さなくなつたもので満されてゐることであつてその中でも大きな場所を占めてゐるのが友達である。今まで生きて來た年數を又生することは考へられなくて、それは少しも構はないことであるが現在までに恩を受け、或は世話になり、そして他にどうといふことが別になかつたのでも友達がゐるといふことの喜びを覚えさせてくれた友達を自分が生きて行くに従つて失ふことになるのを免れないのはその度毎に自分が死ぬやうなものである一方、年とともに新たに友達が出来ることも事實であつて更に自分と違つて友達といふのが生死を越えて存在するものとも考へられる時に友達は生きて行くうちに殖えるばかりであるといふ感じにもなる。併し友達が自分と違つてといふのは自分が死ねば友達の記憶も含めて自分の立場からする凡てが終るからであり、その記憶を少しでも残して置きたければ書き留める他ない。それ位のことをすることに友達といふものは價する筈である。今これまでの半生か何

かを振り返ると頭に浮ぶ友達の多くは既に死んでゐて生死を越えての存在と言つてもこれはともに酒を酌むこともその笑顔が見たくて可笑しな話をすることもなくて打ち過ぎたといふことを變へるものではなくて友達甲斐がないことになつても仕方がない。そして生きてゐて現に生きる喜びを教へてくれる友達も何れはこつちが死ぬといふことがある。その友達のことを書くならばこれも今のうちである。

これから生涯に會つた友達のことを會つた順に書いて行かうと思ふ。Sie hören nicht die folgenden Gesänge……といふ「ファウスト」の序詞を讀んで眼が涙で霞んだのはその時に既にその何人かが死んでゐたのだらうか。併し幸にこれを讀んでくれる友達もまだ少くない。ここで戀愛のことを持ち出してゐる筈であつて友情と戀愛は違つても幾人かのものが時空の限界を越えて自分とともにある點ではこの二つは同じであり、ここで或る時は既に死んだものを、又或る時は明日にでもどこかで會つて巷談に暇が潰せるものを扱つて證券その他の商品とは別な價值があるものの價值に變動はないことを實地に驗して見たい。何れは誰もが死ぬのである。その保證があつて我々は生きてゐるとも言へるのであるが、さうして生きて行く上で勇氣を與へてくれるものの中に友達があるといふことも出来ることならば合せて語りたい。

それで先づ牧野伸顯である。その家に生れて牧野さんが八十九歳で死ぬ時まで途切れがなくて付き合つたのであるからこれは多くの友達の中でも一番の舊友であることになる。牧野さんはこつちが生れた時に五十二歳だつたとその種類の文獻に出てゐるから四十年に近い付き合いになるが、それがこ

つちがもの心付いた時に受けた印象が年取つた人といふもので最後までそのことに變化がなくて格別に老けたとも思へなかつたのであるから子供の頃に受けた印象といふのはそれ程強いものらしい。併しそれもあるとして牧野さんといふのがさういふ人だつた。例へば木は種が先づ實生になり、これが次第に木らしい形を整へて行つてその木と言へる所まで來た後は年とともに幾ら大木になつてもそれがその木であることは一目で解る筈であり、どう考へても同じ木とは思へないといふやうなことになる。そして人間の中にも木に似たのがゐる。又それが少しも當り前なことではないので人間の場合は智慧、或は奸智が働いて何年か間を置いて會ふといふ意味でも悪い意味でも見違へるやうになつてゐるといふのが別に珍しいことではない。

牧野さんはいつとも牧野さんだつた。その父の大久保利通に連れられて歐米訪問の使節團に加り、アメリカの中學校か何かに留學させられた當時のその制服を着て兄の利和と竝んで映つてゐる古い寫眞を見たことがあるが、その十幾歳の少年が不思議に、そして紛れもなく牧野さんだつた。もし或る非常に強いもの、従つて極めて柔軟なものを持つて生れてゐるならばその持ち前のもので凡ての變化と刺戟に對應し、丁度木が風雨に堪へてその木の形をなして行くのと同じ具合に一箇の人間になり、それからただその人格を完成して行くばかりといふ場合も生じ得る。その完成は圓熟もあり、遂にこれが終了して一箇の人間が動かせない一つの事實になる。それが自然といふものの作用の仕方であらういふ話を牧野さんから聞いたことがある。そのアメリカの學校では牧野さんを異人種と見て恰好な布教の材料と考へたのか、或る日校長がその細君と同列で牧野さんと呼び、お前を作つたのは誰かと聞いてお決りの造物主論に話を持つて行かうとした。併しこれは當時の牧野さんにも愚問に思はれ

て私の父親と母親が私を作りましたと答へた所が清教徒の精神に凝り固まつた校長夫婦は狼狽して布教工作が打ち切りになつたといふことである。これが自然に逆はずにゐるといふことである。

それからの學歴といふやうなことは交遊録の材料にならない。牧野さんが十六歳で父を失つた後の一、二年のうちに一番嬉しい思ひをしたのは外務省御用掛を命じられてから二十歳で書記生に任じられて在ロンドンの日本公使館勤務を命じられた時だつたらしい。その前に御用掛の辭令を貰つて別に月給は幾らといふ申し渡しがあり、自分は見習ひの意味で御用掛になつたので月給まで貰ふことはないと考へ、又それには恐らく自分が月幾らと値踏みされたことに對する反感も手傳つてその上役に別室で改めて會つて月給の方を斷ると上役がそこから出て行つて暫くして戻り、それでは月給のことは承知したと答へて月給なしと決つたといふ経緯があつた。併し書記生になつてロンドンまでの旅費を當時の通貨だつたメキシコ・ドルで支給された時はその一袋の銀貨を手につつてもう大丈夫だと思つたさうである。それは嬉しかつたに違ひない。牧野さんは既にアメリカを知つてゐて船や大洋や外國の町が一度その味に馴染んだものにその記憶もあつてどれだけの魅力を持つものだつたかはその頃と違つて飛行機が發達し、觀光が大規模な企業になつた今日の我々に想像し難い。

その行く先が十九世紀末のロンドンだつたことも考へていい。當時の日本は役人に仕事をさせることが主眼になつてゐて志がある青年が役人になることを望むのが普通だつたから制度の方も融通が利いて牧野さんの官歴を見ても外交から内政、それから又外交へといふ風に殆ど無造作に流動してゐる感じであるが、その仕事の相當な部分を外交が占めてゐてその舞臺は十九世紀末のロンドンが振り出しのヨオロッパだつた。十九世紀末のヨオロッパといふのは或る意味では世界の一部としてのヨオロ

ツバが漸くその輪廓を現しつつあつた時期であり、それとは別にそれまでのヨオロッパの終焉と考へられるものでもあつた。これは限らない豊饒といふことであつて牧野さんはそれをロンドンでも後にウィーンでも味つたことになるが、それが先づロンドンだつたことは人間と場所の關係に偶然以外のものがあることを感じさせる。その上にロンドンの次が年代の上では大分後でもロオマでの短い期間を置いて日露戦争が始つてゐたフランツ・ヨーゼフ治下のウィーンだつた。

牧野さんはロンドンの話になるとこの町が初めは何もない所のやうに見えてそのうちにそこに何でもあることが解つて来るのは袋の中に眞珠が入つてゐるのに似てゐると言つてゐた。ロンドンでの生活は本當に楽しだらしい。又それが公使館での仕事と一體をなしてのことである生活振りが仕事振りでもあり、その話を聞いてゐるとそれが例へばもつと後になつて日本の商社といふやうなものの駐在員が誰にも引けを取らずに他社を出し抜かうと懸命になつたりするのは大分違つてゐるのが感じられた。さういふ始めての國に行つてその風俗や習慣に馴れることを心掛けるのはいつの時代にも同じと思はれるが、それが牧野さんの場合はロンドンの英國人の家庭に住み込んで社交の上で必要なことだといふのでボルカ、ワルツ、ポロネズなどのダンスを習ひに行つてはその家庭の娘さん達に稽古を付けて貰ひ、他所の家に約束をして儀禮的に訪問に行く時は十五分以内にそこを辭去してその間外套を脱がずにゐるものであることを知つてその通りにやつて交際先の家を訪問して廻つてゐる。それが仕事の爲にもなすべきことだつたのでも牧野さんがこれを生活としても楽しんでゐたことは晩年になつてもブルウ・ダニエウブのワルツの音を聞く時には心が浮き浮きすると言つてゐたことで解る。その儀禮的な訪問は十五分以内といふやうなことは今のロンドンにももうない。併し今のロンドン

になくなつたものはまだ他にもあつて當時は今日の日本のとは大分違つた本式のトルコ風呂がロンドンで流行し、それでシャアロツク・ホルムスもコオナン・ドイルがホルムスものを書き出した頃の話では盛にトルコ風呂に出掛けるが牧野さんもこれを愛用したらしくてそのことも何度か聞いたことがある。尤もこれはかなり贅澤なもので更に又そんなことをしなくても金は掛り、例へば洋服は場末の仕立て屋に作らせれば三ポンドですむのに一流の店では一着十何ポンドもしてそれでも安ものを着てゐれば直ぐに見抜かれるので無理をしてでも一流の店に行かなければならず、さういふことで苦勞して質屋にも出入りしてゐたといふことだつた。又一方では國際法の講義を聞きにロンドンの法學院の一つに通ひ（牧野さんの場合は *Lincoln's Inn*）、日本領事館が手不足になつて領事代理になつた時には日本政府直轄の貿易の帳付けに簿記を二週間で覚えてゐる。

それから牧野さんはウォルター・スコットの小説を愛讀してゐる。これも社交の話題の種に、又英國人の性格を知る爲にと言つたことが最初の目的だつたらしくてスコットの小説も十九世紀末になつてからも英國で流行してゐたのであるがそれを愛讀する餘りに自分もかういふものが書きたいと思つたことがあるといふか言つたのを覚えてゐる。牧野さんのさういふ態度が新知識を求めるといふやうなものでなかつた。初めにアメリカに行つてアメリカに對して殊に當時は凡てが本場である英國に行くことを望み、そこへ行つてトルコ風呂があれば出掛け、スコットの小説のことを聞けばそれを讀んで熱中し、恐らくはその頃の日本公使館からさう遠くない所にロンドンの四つの法學院があつてその一つで法律の講義を聞き、議會にも度々傍聽に行つてグラッドストンとデイスレーリが議場で一騎打ちする光景もいつか話してくれたことがあつた。その時は野黨側のグラッドストンが政府を攻撃する

演説が猛烈を極めて首相だつたディスレーリが答辯に立ち上ると先づ一言、グラッドストーン氏と私の間にこの卓子があつてよかつたと自分の前にある書記官長の卓子を指差したさうである。それに就てもう少し説明する必要があるならば英國の議會では與黨と野黨の席が狭い通路を距てて竝行して設けられてゐるから政府と野黨は文字通りに對立して應酬を重ねることになる。

そのやうに牧野さんの英國での滞在には無理がなかつた。それと比べれば典型的な大正人だつた荷風の遊學は勿論のこと牧野さんと同じ明治の人間だつた鷗外のドイツ留學もどこか氣負ひ込み過ぎてゐる感じがする。又拗ね方が徹底してゐて何の爲に英國まで行つたのか解らない漱石の渡英とも牧野さんのは正反對で牧野さんは徹底してといふやうな觀念さへもない様子で英國での生活をただ楽しんでゐる。それが晩年になつて英國での朝の食事にはトオストとバタとマアマレエドがなければとよく言つてゐて、これは今でも英國のパンを焼いたのはバタを付けてオックスフォード邊りで出来たマアマレエドを塗るのが英國で朝の食事をするものが喜ぶことの一つである。何故かそれで牧野さんの横文字の筆跡を思ひ出す。その書も見事なものだつたが横文字の方もこの頃はどこに行つてももうないと思へないものであの筆跡にはオックスフォード産のマアマレエドもヴィクトリア時代のトルコ風呂もディスレーリの下院での演説も辻馬車の馬蹄の響もあつた。

その頃は洋行歸りといふことが言はれて、この言葉の背後にあるものが今日でも本質的に少しも違つてゐないことは外國のものが服裝から文學に至るまでただ外國のものであるといふことだけで幅を利かせてゐることによつても明かである。併しこで言ひたいのは牧野さんが洋行歸りでなかつたといふことである。又この頃耳にする所謂、國際人でもなかつた。そして牧野さんがさうでなかつたも

のはまだあつてこれは自分の國である日本からも眼を背けてゐる神國日本主義者でもなかつた。それが牧野さんに就ていつも不思議に思つてゐてこの頃になつて漸く納得出来るやうになつたことでそのことをなるべく簡単に、或は寧ろありのままに言へば牧野さんにとつて日本は日本といふ國であつて序でにこれは自分の國でもあり、英國ならば英國に行けばこれは英國といふ國なのだつた。これは當り前なことやうであつてさうでもない證據にこつちが日本の方が外國よりもいいとか外國の方が優れてゐるとかいふ話にならない問題に悩まされてゐる間は牧野さんの態度がどうにも腑に落ちなかつた。

併し今日の方が洋行歸りの氣分が或は前程は露骨でなくなつてゐるかも知れない。牧野さんが晩年にまだ在職中でも大分暇になつて鎌倉を引退の場所と決めてゐたことがあつて、その頃そのホテルに連れて行つて貰つたりするとさういふ場所に乗馬服に鞭を持つて英國の地主そつくりの恰好をしてゐるとか、要するにさう言つた人間が來てゐてその服の着こなし方も板に付いてゐたが、それが羽織り袴の牧野さんと話をしてゐるのを見ると牧野さんの方が明かに本ものだつた。これは牧野さんが日本人として相手の英國の地主振りよりも本ものだつたといふのではない。どういふ本ものでもそれがさういふものである限りではその產地、國籍、歴史といふやうなものがあるに決つてゐて國際人といふのが嘘であるのはどこの國にも生れたことがない人間などといふものがある譯がないからである。併し又本ものであることに掛けてはその產地その他を問はず凡て同じであつてそれが我々の生活を豊かにするのもあり、又それ故に光琳の屏風の前にタナグラの像を置いても別に矛盾を感じることはない。